
ストライクウィッチーズ 未来から現れし戦乙女

オリハルコン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ストライクウィッチーズ 未来から現れし戦乙女

【Nコード】

N4882Y

【作者名】

オリハルコン

【あらすじ】

アフリカへ派遣されることとなった日本皇国自衛隊。その自衛隊の艦隊が、突如ストライクウィッチーズの世界へと転移してしまう。

彼ら、そして彼女たちの運命は…

なお、この世界の自衛隊にもウィッチ隊が存在します。

出現（前書き）

見切り発進ですが、それでもよろしければ読んでみてください。

出現

2015年8月中旬

大西洋上、風と波を切る音だけが聞こえる飛行甲板。

遙か遠くに見えるのは、水平線を挟んだ海の青と空の青。どこかのCMじゃないけど、その微妙な違いは、確かに綺麗…

そんな海の上を白波蹴立てて進むのは、私たちの家であり、職場である航空護衛艦【しゅんほう】。航空護衛艦と回りくどい言い方をしているが、要は航空母艦である。日本人特有の、「配慮」と言ったところだ。

なぜ私たちがここに居るのか、それは…5年前にさかのぼる。

2010年から始まったアフリカ北部での大規模怪異…通称「アラブの冬」。

人類は多国籍軍を投入し、これを抑えようとしたが、戦況は初戦から思わしくなく、膠着状態が続いている。

その多国籍軍の中には、日の丸をつけた部隊…自衛隊の姿もあった。産油国の多いアラブ周辺には日系企業が多く展開し、また先の湾岸戦争不参加による他国からの風当たりもあり、日本政府は早くから自衛隊による支援を開始。

邦人を含めた非戦闘員の避難や、前線部隊に対する補給作業など、後方での活動が殆どであったが、膠着する戦況は、自衛隊と言う先進国の戦力を、遊ばせることを許さなくなった…

こうして今…2015年8月、自衛隊は陸海空前線戦力のアフリカ派遣を決定。

その規模は…

陸上自衛隊、1個普通科連隊戦闘団

海上自衛隊、1個機動護衛隊と1個護衛隊

航空自衛隊、戦闘飛行分隊と空中給油輸送機

この内、既に航空自衛隊のF-15FJ戦闘攻撃機、KC-767J空中給油機と陸上自衛隊の一部が到着し、活動を始めている。

そして今、大西洋を渡っているのは旗艦「しゅんほう」以下、巡洋護衛艦2隻と護衛艦6隻。陸上自衛隊の部隊装備を載せた、揚陸指揮艦「おおすみ」を中心とした、揚陸艦2隻と補給艦2隻。合計14隻の艦隊だ。

しゅんほうには戦闘機1個飛行隊22機を中心に、E-2D早期警戒機4機、各種ヘリコプター6機を搭載するほか、対ネウロイ戦の要となるウィッチ10名も装備と共に乗艦している。その周りを、イージスシステムを搭載した巡洋護衛艦「きぬがさ」「あまぎ」とFCS-3レーダーを搭載し、高度な防空能力を持つあきづき型護衛艦2隻が固める。さらに後方には、第2護衛隊群第5護衛隊から派遣された護衛艦「しらね」「はぐろ」「さみだれ」「うみぎり」が護衛する支援艦隊がある。その支援艦隊旗艦「おおすみ」には陸自の司令要員の他、1個戦車中隊が乗艦しており、後続する揚陸艦【のと】輸送艦【いず】には、主力となる普通科中隊3個に加え、野戦特科大隊、その他各種職域の部隊計1700名が乗艦。さらに各種ヘリコプターが搭載されており、さながら航空母艦のようだ。実際の部隊規模としては、あと2個普通科中隊が付くのだが、先発隊として派遣された航空自衛隊や施設大隊の護衛として、既に現地入りしている。そのため現在ある戦力で部隊を編成したら、3個普通科中隊戦闘群が完成する。

夏らしい強い日差しを放つ太陽が、真上を少し過ぎた頃、艦隊上空に戦闘機のエンジン音が響き始めた。先ほど訓練に向かった戦闘機隊が戻ってきたようだ。

牽引用のタグや緊急時の消防車が待機する脇を、色とりどりのベス

トを着た作業員が駆け抜ける。艦尾からはエンジンの音と共に、戦闘機が着艦姿勢を取りアプローチしてくる。

航空母艦と言う艦種ができた時からが一番の問題…それが着艦。波の影響で不規則に揺れる飛行甲板に、叩きつけるように機体を着艦させるのは、いつの時代でも難しい。

そんな風景を見つめているのは、海上自衛隊3等海佐であり、第6航空群第172飛行隊に所属する、フジタアカリ藤田朱里、海自所属の飛行ウィッチだ。

そのため階級に対し、歳はまだ21歳になったばかりにすぎない。

「いつも見ますけど、ほんとによくあんな距離で着艦させられますねー」

同じように着艦風景を見つめているのは、朱里のウィングマンを務める、アマミヤミノ奄宮美園1等海尉。

自衛隊では、飛行隊長、飛行班長を含めた10人で一つの飛行隊を編成しており、美園はの中で、最小単位の2機編隊を編成したときに、朱里の直接の配下になる。

そして今二人は、甲板上でアラート待機任務に就いている。履いている飛行脚には、既に近射程ミサイルが搭載されており、右腕には実弾の詰まった13？ガトリングガンが装着されている。

「彼らだって、それをこなせるだけの訓練を積んでいるもの。特に今回の派遣は、戦技会で空自にも勝った飛行隊を連れてきているしね。」

そう言いながら目の前にタキシングしてきた機体を見つめる。

海空両自衛隊が保有する最新の純国産戦闘機、F/A-4戦闘機。通称…ファントムゼロ。

高いステルス性と機動性を持つ、第5世代戦闘機として配備された機体だ。

世界的に見てもトップクラスの性能を持つこの機体でも、私たち人類の敵を倒すことは出来ない。

それができるのは私達…ウィッチだけなのだ…

普段と変わらない甲板上と違い、艦内のある一室では、不穏な空気が漂っていた。

『ホーム…こちらホークアイ02。レーダーコンタクト。アンノウン、数は3。艦隊方位210度、高度18000フィート、速度200ノットで飛行中…』

「目標の詳細は？」

『不明…いや、ESM探知！ネウロイの反応を確認！』

「現針路を維持した場合、およそ30分で、【あまぎ】の迎撃圏内に入ります。」

「全艦に対空戦闘準備を発令。飛行長、スクランブルをかける！」

「艦長！「どうした？！」レーダーに異常発生！ノイズが酷く、探知不能！」

「通信システムにも異常！GPS、衛生データリンク、遮断しました！」

『ガガガ…こ…ら、ホークア……ム、応答せ…』

「こちらホーム、ホークアイ02、よく聞こえない、繰り返せ！」

「ふっ、藤田2佐！これって…」

「一体…どうなってるの…？」

さっきまで雲一つない快晴だった空は、瞬く間にどす黒い雲に覆われ、周囲には霧が立ち込め始めた。

霧は徐々に濃くなり、5メートルと離れていない美園の姿までもが、霧の中に消えていった。それだけでなく、徐々に声までもが聞こえなくなり、いつしか意識までもが、彼方へと途切れて行った…

目が覚めたときは、辺りはすでに明るくなっており、腕時計で時間

を確認すると、一時間もたつていなかった。

「隊長…私…どうしたんでしょうか？」

「解らない…むしろ、私の方が聞きたいわよ…」

「カン・カン・カン・カン・カン…対空―戦闘よーい！！」
「えっ！！」

スピーカーから突如響き渡った戦闘発令。

すかさず朱里はユニットのスターターを回す。それに気づいた整備員が近づき、発進準備に取り掛かる。

その後、魔力ファンが空気中のエーテルを切り裂く独特の金属音が響き始め、インテイクからものすごい勢いで空気を吸引し始める。

「シアラー03、ホーム。艦隊方位210にアンノウンを探知していたが、現在はロスト。ホークアイ02が再度探索しているが、まだ発見できていない。発信準備を待機せよ。」

「シアラー03ラジャー、現状で待機する。」

準備が終わった所で、待機が命じられてしまった。

だが混乱はまだ終わらない。

「シアラー03、艦隊方位140度に新たな目標の出現を、【はぐろ】が探知した。ただちに発進し、支援艦隊を援護せよ！」

「シアラー03ラジャー、スクランブル！…もう…一体どうなってるのよ！」

待機かと思えば又しても発進。しかも、先ほどとは方角が全く違う支援艦隊の方向からだ。先ほどの異常現象からまだほとんど時間がたつておらず、司令部も混乱が収まっていないようだ。

ともかく発進準備は整った。そのまま発艦ポイントへと向かい、ストライカーユニットを固定する。背後にはジェットブラストディフレクター――ジェット排気をせき止めるつい立がそそり立つ。そこで一気に魔導タービンを最高潮にまで持っていき、そして…

「シアラー03、テイクオフ！」

ブレーキが外れた体は、ユニットから出るジェット排気の反作用で、急激に加速。艦首を切ったところには、300ノットに達していた。

そのまま円を描くように上昇。すぐ後ろには、美園もついて来ている。

そして十分に高度を取った所で、艦隊後方に位置する支援艦隊へと向かって行った。

「司令、先ほど、旗艦【しゅんほう】からアラートウィッチが、こちらの支援のため発艦しました。」

「到着までの時間は？」

「およそ、15分程度かと…」

支援艦隊は、緊張に包まれていた。

先ほどの異変から大した時間をおかず、突如としてネウロイが現れたのだ。それも、かなり近い位置に…

本来であれば、こちらの前方に位置する主力艦隊が、搭載する早期警戒機を使って先に発見するはずなのだが、後方のこちらが先に見つけてしまったのだから、すぐの航空支援は期待できない。

「衛星データリンクエラー、再接続不能…link-J1にて代行します。」

「link-J1接続確認…【はぐろ】より目標情報入りました！目標多数、我が方に向けて真っ直ぐ接近。高度4000、数…50以上！」

「クソッ…対空戦闘用意、対空見張りを厳となせ！」

『対空―戦闘よーい！！』

（こうなった以上…【はぐろ】に賭けるしかない…）

支援艦隊の旗艦を務める揚陸指揮艦【おおすみ】に乗る司令は、前方を進む一隻の護衛艦を見つめた。

護衛艦【はぐろ】は、改めたご型護衛艦の1番艦として就役したイージス艦だ。自艦を含めた周りの艦が、個艦防空能力しか持たない

のに対し、【はぐろ】はエリアディフェンス——艦隊防空能力を持つ。

しかし一度に迎撃出来る数は20に満たない。
それでも……いまはやるしかない。

「艦隊司令より全艦に対し、艦隊防空行動が発令されました。」
『支援艦隊司令より《はぐろ》。艦隊外縁の目標から順次迎撃。こちらに近寄らせるな。』

「了解。…対空戦闘開始、CIC指示の目標…砲撃はじめ！」
「目標3群に散開。以降、目標群アルファ、ブラボーチャーリーと呼称。」

「目標群アルファ最接近、迎撃優先を具申します。」
「了解した。目標群アルファ、Track No. 1-6-0-1から1-6-0-8に対し、SM-6をセミアクティブモードで発射用意。イルミネーターレーダー、スタンバイ。」

「イルミネーターレーダー、ターゲットマーク。VLS解放、SM-6発射用意よし。」

「SM-6、発射始め！」
「リコメンドファイア…てえええー！！！」

号令と同時に、艦橋直前の甲板に埋め込まれたVLSから、炎と共にミサイルが飛び出す。1秒おきに8発のSM-6スタンダードミサイルが撃ち出され、白い煙の尾を引きながら上空へと吸い込まれた。

このSM-6は最新の艦隊防空ミサイルであり、発射母艦から直接誘導されるセミアクティブモードと、目標をミサイルが直接捕捉し自律誘導するアクティブモードの二つで誘導できる。そして、ネウロイの大群の中でも艦隊側に飛び出ていた8機に命中、あるいは近

接信管が作動し粉々に砕け散った。

（もうすぐ見えてくるわね…）

【しゅんほう】から発艦しておよそ10分…。アカリ達は支援艦隊上空に来ていた。

艦隊に被害は見られない。【はぐろ】が接近してくる敵から次々と撃墜しているからだ。またそれだけでなく、【しゅんほう】から朱里達に遅れながらも発艦した、2機のF/A-4C戦闘機…ファントムゼロも戦闘に加わっていたのだ。スーパークルーズ——超音速巡航で艦隊に向かい、途中で二人を追い越した後、【はぐろ】と共にネウロイと戦っていた。しかしアラート用のファントムに積んでいるミサイルは各機2発のみ。機関砲も2〜3機を墜とせば弾も切れる。二人が来たところ、ちょうど全弾撃ち尽くしたところだったようだ。

『シアラー03、こちらファントム21。ターゲットの半分はやったが、本体は潰せていない…後は頼む。』

「シアラー03ラジャー。私達でとどめを刺します！」

「隊長、本体の情報が入りました。」

美園の言葉を聞き、朱里はHMD——ヘッドマウンドディスプレイを見つめる。ネウロイの編隊の中でもさらに後方に位置する個体がマークされている。コアを持つ本体だ。

「美園、あなたはここで艦隊の援護を。私が突入して、本体を撃墜するわ。」

「私一人で…ですか…」

「大丈夫。すぐに応援の零達^{レイ}やファントムも来る。じゃ…任せたわよ！」

「解りました…気を付けてください！」

美園の言葉を聞き、朱里はネウロイの大群へと向かって行った。

出現（後書き）

キャラクター紹介

名前：藤田朱里
フジタアカリ

階級：3等海佐

年齢：20歳

身長：157cm

体重：身長に対する平均値

好き：紅茶

嫌い：嘘、詐欺（人を騙すこと）

趣味：裁縫

特技：刺繍

容姿：黒髪ショート

性格：お姉さん（基本優しく規律に厳しい）

使い魔：黒猫

固有魔法：空間把握

使用装備：11式艦上戦闘脚 F U 3 A

99式13mm多銃身機関砲

S I G P 2 2 0 9mm拳銃

設定（前書き）

自衛隊の戦力です。

護衛艦や輸送艦は、オリジナルの物のみ詳細を書いています。

これ以外にもいろいろ出てくる予定ですが、とりあえず最低限のものを書きました。

設定

登場する自衛隊の戦力を紹介します

海上自衛隊派遣艦隊

機動艦隊

第1機動護衛隊：CVA-11しゅんほう、CG-53きぬがさ、CG-55あまぎ

第21護衛隊：DDA-161あきづき、DDA-162てるづき

後衛艦隊

第5護衛隊：DDH-143しらね、DDG-179はぐろ、DD-106さみだれ、DD-158うみぎり

支援艦隊

LCC-4001おおすみ、LHD-4101のと、LPH-4204いず、AOE-246おうみ、AOE-247とうや

しゅんほう型航空護衛艦

基準排水量：44,000t、全長：281.5m、飛行甲板：66.0m、全幅：38.9m、吃水：8.15m

機関：東芝 改沸騰水型原子炉2基、三菱 2胴衝動型蒸気タービン4基4軸推進

出力：180,000hp、速力：30Kt以上

乗員数：1,500名、飛行科要員：400名、ウィッチ：10名、司令部要員：30名

電子装備：レーダー：FCS-3改多機能レーダー、OPS-20航海レーダー

ソナー：OQS-5艦首ソナー（バウソナー）

FCS：FCS-3改00式射撃指揮装置改（ミ

サイル用)

電子戦：NOLQ-3C 統合電子戦装置、Mk-36
SRBOC 対抗手段システム (Mk-137 チャフ・フレア
発射機)

武装：Mk-15 CIWS Block 1B (高性能 20mm
機関砲) 2基

Mk-41 mod-2 VLS 1基 16セル

—SAM 改善型シースパローESSM

艦載機：航空機約50機 (飛行甲板搭載数：最大約50機、艦内
搭載数：約20機)

F/A-4C/D CTOL 艦上戦闘攻撃機×22機

E-2C/D CTOL 早期警戒機 ×4機

SH-60J/K 哨戒ヘリコプター ×4機

UH-60JA 救難ヘリコプター ×2機

同型艦：CVA-11しゅんほう、CVA-12はくほう

いこま型護衛艦 (日本版タイコンデロガ級)

基準排水量：7,655t 全長：172.8m 全幅：16.

8m 吃水：7.5m

機関：LM2500ガスタービンエンジン4基COGAG方式2
軸推進

出力：80,000hp 速力30Kt以上

乗員数：350名

電子装備：レーダー：AN/SPY-1B 多機能レーダー、O
PS-11C 二次元対空レーダー、OPS-28 対水上レーダー、
OPS-20 航海レーダー

ソナー：OQS-101 艦首ソナー (バウソナー)

FCS：FCS-281 式射撃指揮装置 (127
mm 砲用)、Mk99/SPG-62 射撃指揮装置4基 (ミサイル
用)

電子戦：NOLQ-2統合電子戦装置、Mk.36
SRBOC対抗手段システム(Mk.137 チャフ・フレアー発
射機)

兵装：Oto Melara 54口径127mm単装速射砲1基

Mk.15 CIWS Block1B(高性能20mm

機関砲)2基

Mk.41 mod.0 VLS 2基 61+61セル

—SAM スタンドロミサイルSM-2MR

—SAM 改善型シーパローESSM

—USM アスロツクミサイルVL-ASROC

—SLCM トマホーク巡航ミサイル

SSM ハイプーン Mk.141 4連装発射機2基

HOS-301 68式3連装短魚雷発射管2基

艦載機：SH-60J/K 哨戒ヘリコプター2機

同型艦：CG-53きぬがさ、CG-54かさぎ

あまぎ型護衛艦

基準排水量：8,000t 全長：173.5m 全幅：21.

0m 吃水：6.3m

機関：LM2500ガスタービンエンジン4基COGAG方式2

軸推進

出力：100,000hp 速力30Kt以上

乗員数：320名

電子装備：レーダー：AN/SPY-1D(V)多機能レーダー、

OPS-32A三次元低空警戒レーダー、OPS-20航海レーダー

ソナー：SQS-53E艦首ソナー(バウソナー)

FCS：FCS-3-21B 00式射撃指揮装置

2型1B(127mm砲用)、Mk99/SPG-62射撃指揮装

置4基(ミサイル用)

電子戦：NOLQ-2C統合電子戦装置、Mk.36

SRBOC 対抗手段システム (Mk. 137 チャフ・フレアー
発射機)

兵装：10式60口径155mm単装砲1基

08式75口径51mm高速射砲2基

Mk. 49 Block 1 RAM 11連装発射機2基

Mk. 41 mod. 15 VLS 2基 64+64セル

— SAM スタンダードミサイル SM-6 Block?

— SAM 改善型シースパロー ESSM

— USM 07式短魚雷投射ロケット

— SGM 09式長距離多目的誘導弾 SGM-1

SSM-1B 90式艦対艦誘導弾4連装発射機2基

HOS-303 68式3連装短魚雷発射管2基

艦載機：SH-60J/K 哨戒ヘリコプター2機

同型艦：CG-55あまぎ、CG-56かつらぎ

はぐろ型ミサイル護衛艦

基準排水量：7,700t 全長：165.0m 全幅：21.

0m 吃水：6.2m

機関：LM2500ガスタービンエンジン4基 COGAG方式2

軸推進

出力：100,000hp 速力30Kt以上

乗員数：310名

電子装備：リーダー：AN/SPY-1D(V)多機能リーダー、

OPS-28F対水上・低空警戒リーダー、OPS-20航海レー

ダー

ソナー：SQS-53C艦首ソナー(バウソナー)

FCS：Mk160(127mm砲用)、Mk99

/SPG-62射撃指揮装置3基(ミサイル用)

電子戦：NOLQ-2B統合電子戦装置、Mk.36

SRBOC対抗手段システム(Mk.137 チャフ・フレアー

発射機)

兵装：Mk.45 mod.4 62口径5インチ単装速射砲1基

Mk.15 CIWS Block1B(高性能20mm

機関砲) 1基

Mk.49 Block1 RAM11連装発射機1基

Mk.41 mod.2 VLS 2基 64+32セル

—SAM スタンダードミサイルSM-6 Block?

—SAM スタンダードミサイルSM-3 Block

?A

—SAM 改善型シースパローESSM

—USM 07式短魚雷投射ロケット

SSM-1B 90式艦対艦誘導弾4連装発射機2基

HOS-303 68式3連装短魚雷発射管2基

艦載機：SH-60J/K 哨戒ヘリコプター2機

同型艦：DDG-179はぐろ、DDG-180まや、DDG-

181なち

おおすみ型揚陸指揮艦

基準排水量：13,000t 全長：200.4m 全幅：25.

8m 吃水：8.0m

機関：LM2500ガスタービンエンジン2基COGAG方式2

軸推進

出力：40,000hp 速力22Kt以上

乗員数：180名

電子装備：レーダー：OPS-14C二次元対空レーダー、OP

S-28D対水上レーダー、OPS-20航海レーダー

FCS：FCS-2-22A/23 81式射撃指

揮装置2型2A/2型3(76mm砲用)

電子戦：OLR-9C ミサイル警報装置、Mk.3

6 SRBOC対抗手段システム(Mk.137 チャフ・フレア

Ⅰ 発射機)

兵装：O t o M e l a r a 62口径76mm単装速射砲1基
M k . 15 C I W S B l o c k 1 B (高性能20mm
機関砲) 2基

艦載機：M V - 22 J V / S T O L 輸送機

A H - 1 S / 64 D 戦闘ヘリコプター

C H - 47 J / J A 大型輸送ヘリコプター

U H - 60 J A 多用途/救難ヘリコプター ……等最

大4～6機

輸送力：陸上自衛隊約330名(1個中隊戦闘群)

車両：90式/10式戦車10輜

船艇：L C A C エアクッション揚陸艇又は2150号型

交通船2隻

同型艦：L C C - 4001おおすみ

のと型輸送揚陸艦

基準排水量：39,800t 全長：240.0m 全幅：42.

5m(エレベーター含む) 吃水：8.0m

機関：石川島播磨F W D 2 2 胴水管型缶2基、石川島播磨2 胴

衝動型蒸気タービン2基2軸推進

出力：70,000hp 速力22Kt以上

乗員数：1,000名

電子装備：レーダー：O P S - 24三次元対空レーダー、O P S

- 28E対水上レーダー、O P S - 20航海レーダー

F C S : F C S - 2 - 12E/G 81式射撃指揮

装置1型2E/G(ミサイル用)

電子戦：O L R - 9C ミサイル警報装置、M k 36

S R B O C 対抗手段システム(M k . 137 チャフ・フレアー

発射機)

兵装：M k . 15 C I W S B l o c k 1 B (高性能20mm

機関砲）2基

SAMシースパロー8連装発射機3型2基

艦載機：AV-8J VTO L戦闘機

MV-22J V/STOL輸送機

AH-1S/64D 戦闘ヘリコプター

CH-47J/JA 大型輸送ヘリコプター

UH-60JA 多用途/救難ヘリコプター …等最

大20機

輸送力：陸上自衛隊約1,800名（1個大隊）

車両：90式/100式戦車8輦

89式装甲戦闘車/73式装甲車（改）/96式

装輪装甲車/87式偵察警戒車/82式指揮通信車25/30輦

高機動車/軽装甲機動車ほか、各種トラック・補

給・支援車輛70/90輦

船艇：LCA Cエアクッション揚陸艇又は2150号型

交通船3隻

同型艦：LST-4101のと

いず型輸送艦

基準排水量：19,900t 全長：248.0m 全幅：38.

0m 吃水：7.1m

機関：LM2500ガスタービンエンジン2基COGAG方式2

軸推進

出力：56,000hp 速力22Kt以上

乗員数：550名

電子装備：レーダー：OPS-50多機能レーダー、OPS-2

0航海レーダー

電子戦：NOLQ-3C統合電子戦装置、Mk36

SRBOC対抗手段システム（Mk-137 チャフ・フレアー発
射機）

兵装：Mk・15 CIWS Block 1 B（高性能20mm
機関砲）2基

Mk・49 Block 1 RAM 11連装発射機2基

艦載機：MV-22J V/STOL輸送機

AH-1S/64D 戦闘ヘリコプター

CH-47J/JA 大型輸送ヘリコプター

UH-60JA 多用途/救難ヘリコプター …等最

大14機

輸送能力：陸上自衛隊約700名（2個中隊戦闘群）

車両：90式/10式戦車10輦

89式装甲戦闘車/73式装甲車（改）/96式装輪
装甲車/87式偵察警戒車/82式指揮通信車15～30輦

高機動車/軽装甲機動車ほか、各種トラック・補
給・支援車輛70～90輦

F/A-4A/B・C/D戦闘機 ファントムゼロ

全長：17.16m、全幅：12.15m、全高：4.5m、翼

面積：35.66?

空虚重量：12,400kg、最大離陸重量：22,900kg
最大重量翼面加重：642.2kg/?

エンジン：試作初期型：IHI F424-GE-520ターボ
ファン×2基、量産型：IHI F6-35A/Bターボファン×
2基

推力：試作初期型：11,568kg×2、量産型：10,86
7kg×2

速力：M 1.8+、航続距離：試作初期型：フェリー約3,6
00Km、量産型：フェリー約3,750Km

上昇限度：16,200m、乗員数：A/C 1名・B/D 2
名、固定装備：M61A2 20mm機関砲×1基（466発）

外装取付け箇所：10ヶ所（胴体下ウエポンベイ・4、インテ

1ク横ウエポンベイ・2、翼下・4)

搭載可能装備：短射程空対空ミサイル：90式空対空誘導弾(AAM-3)、04式空対空誘導弾(AAM-5)

中射程空対空ミサイル：99式空対空誘導弾(AAM-4)

空対艦ミサイル：80式空対艦誘導弾(ASM-1)又は、93式空対艦誘導弾(ASM-2)

空対地ミサイル：80式空対地誘導弾(AGM-1B/C)又は、02式空対地巡航誘導弾(AGM-2)

爆弾：Mk-82 500lb通常爆弾：無誘導

91式爆弾用誘導装置装備型Mk-82

500lb誘導爆弾：赤外線誘導方式

JDAM 500lb誘導爆弾：GPS及

び慣性誘導方式、レーザー誘導方式

その他：600ガロン増槽、収納式200ガロン増槽、長距離偵察ポッド、戦術偵察ポッド

陸上自衛隊

1個普通科連隊戦闘団約2000名

装備：9mm拳銃、89式5.56mm小銃、MINIMI軽機関銃、狙撃銃、84mm無反動砲、110mm個人携帯対戦車弾

01式軽対戦車誘導弾、87式対戦車誘導弾、81mm迫撃砲、120mm迫撃砲、155mm榴弾砲FH-70

10式戦車、96式装輪装甲車、87式偵察警戒車、82式指揮通信車、軽装甲機動車、高機動車

3・1/2トラック、1/2トラック、特大型トラック、弾薬運搬車：等

AH-1S、UH-60JA、CV-22J

共闘へ（前書き）

タイトルは共闘ですが、物語上もうちよつと先になります。

共闘へ

『ウウウウ——！！！！……レーダーに反応！グリッド南31地点にネウロイを探知。501統合戦闘航空団、スクランブル！！』

「敵は50機以上。小型だけど、これまでと比べて速いわ。」

「フォーメーションは、ハルトマン・バルクホルンが前衛。シャーリー・ルツキーニペアが中衛。リーネと宮藤は私と後衛だ。出撃！！」

「……了解！！……」

まだネウロイに占領されていないブリタニアをはじめ、各地に張り巡らされたレーダー網がとらえた敵影。ヴェネチアの戦いから、ブリタニアに再び拠点を置いた連合軍第501統合戦闘航空団、通称『ストライクウィッチーズ』に要請されたネウロイ迎撃に、副隊長である坂本少佐の割り当てによって、7人のウィッチが空へと飛び立った。

ネウロイ発見の報告からおよそ15分、ようやく中間地点だと思った矢先、突如天候が変わった。

それは通り雨の様な物ではなく、晴れ渡った空が突如曇に覆われ、霧が出てきた全く異質な状況に、7人は戸惑いを隠せないでいた。

「なんだ！さっきまであんなに晴れていたのに……」

「一体どうなっているのですの！？」

「落ち着け！全員固まるんだ！」

お互いが見えなくなる寸前、坂本少佐の言葉に、皆が一ヶ所に固まる。だが不穏な空気はすぐに消えた。さっきまであたりに立ち込めていた霧は、出てきたときのように消え去り、雲もいつの間にか晴れていた。

「あっ……晴れた！」

「変な天気だったな……」

皆が口々にそう言っていた時、無線から慌てた様子のミーナの声が

聞こえてきた。

『美緒！聞こえる？美緒！』

「どうした、ミーナ？」

『レーダーに新しい反応よ。ネウロイが出現した近くに、船舶らしき反応を探知。いま所属を調べてもらっているけど、海軍の増援は予定されていないわ。すぐに確認して、ネウロイから守って！』

「解った、すぐに向かう。」

「坂本さん…」「少佐！」

「解っている。少し油を売ってしまったか…急ぐぞ！」

「…了解！」「…」

ブリタニア基地の管制塔では、慌ただしく船団の確認作業が行われていた。ネウロイの出現が予想されるこの近海では、船舶の航行には厳重な管理がしかれ、防衛を担当するこの基地にも、日々様々な国籍の船の航行予定が届けられている。

しかし、どの予定表を見ても、その船団らしき航行日程は記されていない。

「おかしいわね…どこにも書かれてない。」

今レーダースクリーンに映っている船団は、大型船5隻と中型船2隻、小型船1隻の船団だ。これだけ規模の大きい船団なら、書洩らすはずがない。なのに…

そんな中、さらに驚くべきことが起きた。

「ミーナ中佐！ネウロイが…一気に8機、消滅しました！」

「えっ！どういう事？まだ少佐たちは到着していないはずよ。」

ストライカーを飛ばしても最低30分かかる距離。まだ坂本達が出撃してから、やっと20分たったところだ。

「まさか、どこかの海軍の艦隊…？」

それが全く違う世界から現れた、未来の艦隊などとは、ミーナ達は
まだ知る由もない。

大量に飛び交うネウロイの中を、朱里はまさに縫うように飛んでいた。

艦隊を狙っていたネウロイ達も、数を半分に減らされ、さらに本体
が狙われていると分かった今、攻撃目標を朱里達に変更していた。

『シアラー03、こちらシアラー05。後10分でそっちに着く。

そっちの様子は？』

「シアラー05…零^{レイ}、そっちは何機？」

『俺と由衣^{ユイ}の2機だ。それで、状況は？』

「今本体に向かつてるわ。美園は艦隊の護衛に残してる。ミサイル
は撃ち尽くしたから、あとはガンだけよ。」

『俺達が来るまで持ちそうか？』

「ちよつと厳しいわね、時間稼ぎするくらいなら、早めに終わらせ
るわ！」

『解った。こつちも急ぐ。』

「了解。」

とは言つても、ホントに厳しいわね。

敵の大半はコアの無い凶タイプ。その分使い捨てのように朱里に群
がってくる。すでにユニットに搭載していたミサイル2発は撃ち尽
くしており、あとは右手に装着された13？ガトリングガンだけが
頼りだ。

敵は朱里のスピードに慣れていないのか、ただひたすら無防備につ
いてくるだけで、射撃の機会を逃しているようだ。反対に朱里はそ
の優位を使い、一撃離脱の要領で着実に数を減らしている。それと
同時に、本体の搜索も怠らない。

（本体は…！見つけた！）

周りに居る紈と全く変わらない見た目。だがHMD（Head Mounted Display）のマークは、確かにそれを捉えている。

「逃がさない！」

朱里の行動に気付いたのか、紈タイプが目の前に防衛線を築く。次々とビームが放たれるが、朱里もこれが最後とばかりに、少なくとも魔力でシールドを張り、一直線に突き進む。そして、HMDの中心に、目標を射程圏内に捉えたことを告げるレイトクルが現れた。「シアラー01、フォックススリー！」

ガンの発射コードを叫びながら、トリガーを引き絞る。

もはや残弾など気にしていない。ここまで来たら、出し惜しみなど必要ないのだから。

3本の砲身が回転し、毎分2000発の発射速度で12・7mm×99弾が撃ちだされる…

魔力で強化された徹甲弾が表面の装甲を撃ち抜き、コアへと達したとき、ネウロイは…すべて白く輝く破片となって消えた。

時代によって変わっていく軍艦の戦闘指揮所。航空護衛艦【しゅんほう】の艦内に作られたCDC（Combat Direction Center）と呼ばれるその部屋は、随伴する護衛も含めた艦隊すべての戦闘を統括する部屋だ。窓の類は一切なく、外の状況を映し出すのは、多数のディスプレイとテレビモニターだけである。

戦闘が終了したにもかかわらず——正確には始まる前からだが騒がしさは続いていた。

「司令。目標全機撃墜を確認。こちらの損害はありません。シアラ

「103…藤田3佐以下4名と、現地のウィッチ2名も、間もなく到着します。」

「そうか…。それよりも、横須賀と国連軍の司令部とは、連絡がついたか。」

「現在も、両者との回線は不通状態です。GPSだけでも復旧できればいいのですが、衛生関連の設備は、データリンクシステムを含めて軒並み…「お話し中失礼します！」…なんだ？」

「はっ！藤田3佐より連絡です。現地のウィッチから得た情報ですが…、それが…」

「どうした、はっきり言え。」

「はい。現地のウィッチ隊は旧式の…、正確に言えば、前大戦期のユニットを使用。話の内容も、どうもかみ合わないそう。極めつけは、日本を知らないとのことですよ。」

情報官からの報告に、その場にいた人間は、首をかしげた。ユニットの件はどうあれ、経済状況が、隣国に追いつかれそうになっているといえど、先進国の一員と自負してきた日本を、知らない国がそうそうあるはずがない。あるとすれば、国や軍隊という概念の無いような、辺境の地にすむ原住民族位だろう。

事態が動き出したのは、ちょうど戦闘が終わった時の事…

「朱里！」「藤田3佐！」

「零、由衣！」

本体を撃墜し、支援艦隊上空で美園と合流した朱里。それから間もなく、零たち増援組も到着した。

大野零1等海尉と、綾波由衣3等海尉。

共に、朱里がリーダーを務めるファーストチームに所属する隊員達だ。階級的には零の方が下なのだが、歳は一つ上だという事もあり、公の場以外では呼び捨てで呼び合っている。

「朱里、怪我は？まったく、無茶ばっかしやがって…」

「それほどでも無かったわよ。」

「^{アミヤ}奄宮2尉の方も、お怪我は？」

「問題なし。デコイ相手だったしね。」

『シアラー03、ホーム！そちらに識別不明の飛行目標が接近しているのを、ホークアイが捉えた。ネウロイではない、ただちに確認せよ！』

「シアラー03ラジャー。…みんな聞いたわね。行くわよ！」

「了解！」

坂本達7人のウィッチ隊は、混乱していた。
突如現れた所属不明の船団…

次々とリーダーから消えていくネウロイ…

そして目の前に現れた見かけないウィッチ達…

周りが混乱の渦に巻き込まれる中、坂本は意を決し、彼女たちの前に進み出た。

「あなた方は…？」

「私達は、連合軍第501統合戦闘航空団、通称ストライクウィッチーズ。私は副隊長の、扶桑皇国海軍少佐、坂本美緒。そちらの所属と、階級氏名を伺いたい。」

「我々は、日本皇国海上自衛隊の者です。私は第6航空群第172機械化戦闘飛行隊の、藤田朱里3等海佐です。あの失礼ですが、扶桑皇国とは…」

「ん…、扶桑を知らないのか？見たところ同じ東洋人のようだが…。その名札の文字は、扶桑語だろう。」

そう言って坂本が指差した先にあるのは、朱里達の左胸についている名札だ。漢字とローマ字で書かれた名前の横には、海上自衛隊を表す錨のマークが入っている。

「すみません。私の知る限り、扶桑皇国という国は聞いたことはありません。」

「何を言っている。確かにリベリオンやブリタニアに比べたら、まだまだ成長する余地のある国だが、それでも東の扶桑・西のブリタニアと呼ばれていた列強の一員だぞ！」

「あ のっ！待ってください…。そのリベリオンやブリタニアも、国の名前なんですか？」

「おいあんだ。あたしの故郷リベリオンをバカにするのか。むしろ、日本 Japan なんて国の方こそ、聞いたことないね！」

「ブ、ブリタニアも、小さいですが、立派な国ですよ…」

「いえ、別にバカにしているつもりは『シアラー03、何をしている。状況を報告せよ！』…すみません、すこし待ってください…。」

「…、坂本少佐、お願いがあります。私達と共に、来ていただけないでしょうか？」

「おい待て！なにを言って「まで、シャーリー。」少佐…」

坂本の言葉に、全員が静まる。その隙に、朱里は今の自分たちの状況を手短に伝えた。

話が終わると、坂本美緒と名乗ったウィッチは、同じ国籍マークをつけた少女と共に、朱里の前へと進み出た。

「解った。私としても、もう少し詳しく話がしたい。こんな沖合にいるということは、十中八九空母から来たのだろう。私と宮藤は海軍だから、空母にも降りられる。あなた方の艦まで行き、そこでゆっくり話したい。いかがだろうか？」

「坂本さん！」「少佐！」「」

「心配するな。ミーナにはバルクホルンの方から、上手く伝えてくれ。よろしいかな、藤田、ふじた…」

「3等海佐です。司令部に確認してみます。「隊長！」いいから…。私の責任で、お二人をお連れします。」

「それで…、二人は彼女たちのところに向かったの!？」

坂本と宮藤が抜け、5人となった部隊を率いて帰還したバルクホルンに、隊長であり美緒の親友でもあるミーナが詰め寄る。とはいえ、徐々に話の内容を聞いていくと、ミーナとしても理解できない部分が多すぎたため、美緒の行動力から考えれば、あながち今回の独断専行は想像できないわけではない。

「まったく…、扶桑の魔女は…」

二人が飛び立ったであろう空を見ながら、勇敢すぎる扶桑乙女に対し、ため息をつく隊長であった。

「これが空母か!？なんて大きさだ。」

「す、すごい…」

朱里達に先導され到着した艦隊主力部隊の上空。

そこにいたのは、これまでの常識を覆す巨大な艦影…海上自衛隊が誇る最新鋭原子力航空母艦の姿であった。

舷側からはみ出した広大な飛行甲板。カタパルトから打ち出される戦闘機。スマートなアイランド——空母における艦橋構造物の名称。離れた空からでも、その異質な存在感は十分に感じられた。

「見事な着艦でした、さすがは海軍軍人ですね。」

見本にと最初に降り立った朱里に続き、向かい風を全身で受けながら着艦。艦の進行方向に対し斜めに降りるとは考えてもみなかったが、戦闘機と違い比較的空中での動きが自由なウィッチなら、コツさえつかめば簡単に降りられる。ただし宮藤の方は危うくオーバーランしそうになり、甲板作業員をひやひやさせた。

「空からでも大きく感じたが、実際に降りてみるとここまでとは。これが未来の空母なのか…」

ここまで来る途中、朱里は互いの話の違いから時代の違いを推測。それは的中し、坂本少佐曰く、今が西暦1945年だということが

判明した。そうであるならば、人工衛星を介するデータリンクや通信、GPSが全てエラーを起こしていることには納得する。

しかしいまだに腑に落ちないのが、互いの国名の違いであった。様々な国の名前を言うが、都市の名前以外、すべて違っているようだ。甲板を横切り艦橋横まで行くと、ユニットごとエレベーターで艦内の格納整備エリアへ下りる。ユニットを固定器具に取り付け脱ぐと、すぐさま点検が始まる。周りでは同様のユニットを整備しており、先ほど甲板上にもいた戦闘機や、お皿を載せた見たことのない双発機、プロペラを機体の上に着けた奇妙な飛行機も又、そこで整備されている。

「お待ちせしました。今担当の者が参ります。」

坂本たちもユニットを預け終わった頃合いを見て、朱里が話しかけた。

そうしている内に、艦の広報を担当する海曹が駆けつけ、二人は応接室へと案内された。

「ううう……。坂本さん…、よく飲めますねえ…」

「な〜に。慣れれば案外おいしいものだ。」

給仕係らしき兵から出されたコ・ヒーだが、慣れていない宮藤にはただの苦い飲み物らしい。坂本のカップが空になるころ、部屋の扉がノックされた。

入ってきたのは3人の中年男性と、先ほどここまで案内してくれた広報官、最後に坂本達との仲介役して朱里も加わり、話し合いの場はそろった。

「さて、まずは自己紹介としよう。私は本艦隊の司令官を務める、タキガワダイスケ滝川大介海将補だ。他国では海軍少将に当たる。」

「自分は司令補佐官を務める、ハセガワコウイチ長谷川幸一1等海佐です。」

「私は本艦【しゅんほう】の艦長を務める、ヤガイマサヒコ矢飼雅彦1等海佐だ。ようこそ【しゅんほう】へ。」

「私は連合軍第501統合戦闘航空団所属、扶桑皇国海軍少佐、坂

本美緒であります。突然のお邪魔に対しこのような場を設けていただき、感謝しております。…ほら、宮藤。」

「えっ、あっ、私は宮藤芳佳です。階級は軍曹です。よろしく願います。」

いきなりの重要人物そり踏みだが、坂本は気後れすることなく自己紹介をする。その後、当たり障りのない会話から始まり、すでに確認されている時代の違いを改めて認識する。そして本題となる、国名の違いについての話題となった。テーブルの中心にある世界地図には、日本やアメリカ、イギリス等の国名の下に、新たにこの世界での呼び名が加えられた。

「…つまり、この世界は国名こそ違えと、歴史的な歩みはほぼ同じということですね。現に、我々の世界でも当時、このようにネウロイと大規模な戦闘が起きていましたし。」

「SF的な言い回しで行けば、“パラレルワールド”でしょうか。」
「信じられない話だが、現実を見ればそうとしか言いようがないな司令、我々は今後、どうすればいいでしょうか。」

艦長の問いに、滝川将補の顔色が曇る。今回の派遣は、国連軍の後方支援とはいえ、戦闘を行うことを予期してはいたが、まさか異世界に転移するとは想像しているはずがない。第一、この世界にきた原因が解らないのだから、帰る方法も当然わからない。どうすればいいと聞かれても、そう簡単に答えが出るはずもなかった。

そんな滝川に、坂本はあえて切り出した。

「図々しい話かもしれないが、共に戦ってはくれないだろうか。あなたの方の戦闘はこの目で見させてもらった。今の私達にとつては心強い存在だ。膠着した戦況も、一挙に打開できるかもしれない。」
予想通りの反応だった。自分たちの力を見れば、そんな考えが出てくるのは目に見えていた。しかし元の世界への帰り道が解らない以上、今後の活動、とりわけ補給の点から見ても、この時代の人間とのパイプ役が必要になる。現に目的地であったアフリカ到着前に、一度イギリスへ寄港し、戦闘前の最終補給を行う手はずだったのだ。

現状の物資の備蓄量からは、二週間が活動限界だ。乗員の生命を守るためには、あえて戦いの道を歩むしか無いようだ。

「そうだな、それしかないようだ。もしかしたら、私たちがこの世界に來た理由が見つかるかもしれない。この戦い、我々に協力させてもらいたい。」

共闘へ（後書き）

キャラクター紹介

名前：奄宮美園 アマミヤミノ

階級：2等海尉

年齢：18歳

身長：152cm

体重：身長に対する平均値

好き：漫画、アニメ

嫌い：酒、煙草

趣味：漫画を読む

特技：漫画作り（薄い本）

容姿：黒髪ショート（アホ毛付）、薄褐色肌

性格：大らか、素で怪力

使い魔：野ウサギ

固有魔法：複数目標同時追尾

使用装備：11式艦上戦闘脚（FU-3A）

82式20mm多銃身機関砲

64式7.62mm小銃

名前：大野零 オオノレイ

階級：1等海尉

年齢：21歳

身長：171cm

体重：身長に対する平均値

好き：運動

嫌い：じっとする事

趣味：スポーツ全般

特技：柔道

容姿：黒髪ショート

性格：大ざっぱ、豪快

使い魔：ツキノワグマ

固有魔法：怪力

使用装備：11式艦上戦闘脚（F.U.3A）

82式20mm多銃身機関砲

64式7.62mm小銃

名前：彩波由衣
アヤナミユイ

階級：3等海尉

年齢：16歳

身長：151cm

体重：身長に対する平均値

好き：勉強

嫌い：激しいスポーツ

趣味：イラスト

特技：風景画

容姿：黒髪ストレート（肩まで）

性格：真面目、時に熱血

使い魔：キツネ

固有魔法：空間把握

使用装備：11式艦上戦闘脚（F.U.3A）

99式13mm多銃身機関砲

SIG P220 9mm拳銃

以上、第1話の朱里を合わせて、第172機械化戦闘飛行隊ファーストチームでした。

合同訓練（前書き）

日本皇国自衛隊、いよいよ本格的介入が始まります。

合同訓練

バルクホルン達が戻ってから約3時間後。落ち着かない様子のミナ
の所に、通信兵が駆け込んできた。

その通信兵によると、無線で坂本から「これよりそちらへ向かう」という内容の電文が送られてきたとのことだ。

それからしばらくし、基地のレーダーに機影が映った。もちろん敵であるはずがなく、無線で確認すると坂本自身が応答した。

「美緒、そっちは大丈夫なの?！」

「なあに、心配ない。私も宮藤も、丁寧なもてなしを受けた。それと、あちらの司令官が対談のため、一緒に来ている。」

「その、ニホンと言う国の司令官が…解ったわ。こっちも準備しておくから。気を付けてね。」

「自分で飛んでいるわけじゃないから、気を付けようがないが…心配いらない。それじゃ。」

通信を終わり、またしてもため息が漏れるミナ中佐。

対談と、美緒たちの乗る飛行機の受け入れ準備が終わるころ、空にゴマ粒のような小さな点が現れ、それは徐々に大きくなってきた。

「ようやく来たみたいだな。」

「それにしても変な飛行機だな。ずいぶんとプロペラが大きいけど、あれじゃ着陸したときにプロペラを折るぞ。」

滑走路に並ぶウィッチーズメンバーや、整備員の間から口々にそんな言葉が漏れる。

機体の直径をはるかに超える、巨大なプロペラを付けた見慣れない双発機は、一度基地上空を旋回すると、徐に滑走路へとアプローチを開始した、その時…

「おいっ！プロペラが、上を向いたぞ！」

驚きの声を上げるウィッチーズメンバーと兵たち。

CV-22J中型輸送機オスプレイ。日本では陸上自衛隊と航空

自衛隊に配備している輸送機で、主に末端輸送を担当している。海上自衛隊には配備されていないが、今回は同行している、陸上自衛隊の機体を借りたのだ。

V T O L——垂直離着陸機特有の機動で、ウィッチ用の短い滑走路に降り立ったオスプレイ。後部ランプが開くと、坂本と宮藤、さらに2名の男性が降り立った。

一人は海軍様式の黒い制服を着ており、もう一人は緑色を基調とした制服を着ていた。肩についた桜を模した階級章に加え、左胸の記章の数から高級軍人であることがわかる。

「ミーナ、この方達がさつき説明した人達だ。艦隊司令補佐官の長谷川幸一大佐と…」

「初めまして。日本皇国陸上自衛隊、アフリカ派遣部隊指揮官の、クドウダイチ工藤大地陸将補です。呼びにくければ、少将で構わない。」

「私は、第501統合戦闘航空団隊長の、ミーナ・ディートリンデ・ウィルケ中佐です。原隊は、カールスラント空軍JG3航空団指令であります。」

あいさつを済ませた3人は、そのままミーナと共に応接室へと移動し、さっそく坂本が提案した戦闘協力と、報酬としての補給支援の話となった。

「我々としては、そちらの戦闘介入は願ってもない話ですが…。よろしいのでしょうか…?」

「何もせず、ただの傍観者になることは、我々にはできません。世界は違えど、今この時も苦しんでいる人がいるのなら、私は戦いたい。そのために、遠く本土から離れて、この地まで出向いてきたのですから。」

5年前の2010年から始まった、アフリカでの大規模怪異…通称「アラブの冬」。彼らはそこに向かう途中だったのだ。

自国防衛のための存在である自衛隊が、海外の戦闘地域…それも第

一線へ派遣されることに、国内では様々な議論が紛糾した。しかし自衛隊の中では、毎日のように流れる戦地のニュース映像を見るたびに、戦地の後方や安全地帯に留まり動かない自分達に、憤りを感じている者が殆どだった。

そんな中、国会で可決された自衛隊アフリカ派遣特別措置法の改正…正式な戦力としての介入。

陸自派遣指揮官に任命された工藤将補にとって、この派遣は、日本として、自衛隊として絶対に成果を上げると誓った派遣なのだ。

「それに私は、この世界に来たのには、何か運命的な、必然性みたいなを感じるのだ。」

「それについては、滝川司令も同じような事を仰っていました。」
父親ほど歳の離れた二人の言葉に、ミーナはもはや反対の言葉をかけることはできなかった。

「解りました。連合軍司令部には、私の方から説明をします。これから、よろしくお願いします。」

ここに、自衛隊とストライクウィッチーズの共同戦線が確立した。
自衛隊は膠着する戦況を打破することができるのか…
そしてこの世界へ転移した意味とは…

自衛隊とストライクウィッチーズとの会談から1週間後、2隻の船がブリタニア基地へと入港した。

海上自衛隊派遣艦隊のうち、支援艦隊に所属する揚陸艦【のと】と、補給艦【おうみ】である。【のと】には陸上の移動手段となる各種車両やヘリコプターが搭載されており、【おうみ】には食料や水、燃料などの補給物資が搭載されていたが、そのほとんどは底を尽き

かけている。

そんな港が見える建物の一角に、臨時に作られた自衛隊の指揮所がある。

「視察ですか…」

「はい。軍事協力の件については、ブリタニア政府や連合軍司令部に報告しましたが、全く知らない軍隊への協力は難しいとのこと、ブリタニア軍司令部が代表として、視察したいと申し出ているのですが、その際…私達との共同訓練を行ってほしいと…」

「これは私の一存ではどうにも。陸自としては問題ないですが…、海自さんはどうですか？」

そう工藤陸将補が問いかける先にあるのは一台のノートパソコン。陸自派遣部隊が設置した自家発電機と可搬式データ通信装置により、【しゅんほう】とはリアルタイムでつながっているため、艦隊司令官である滝川海将補は洋上に居ながら、陸にいる工藤達と会話できる。

『こちらも問題はありません。日にちと時間が決まり次第、連絡をいただければ。』

ミーナの問いに二人の将補は問題ないと答える。自衛隊初の海外戦闘派遣部隊を任されるだけの指揮力を持っている二人だからこそ、こういう不測の事態への対応は早かった。

そして視察当日。異世界へと転生した日からちょうど20日がたったこの日、基地に1機の輸送機が降り立った。

通常の兵員輸送に使われるような爆撃機を改造したのではなく、空調や革張りの椅子が用意されたそれは、現在で言うなら政府専用機といわれる機体だ。

「ささーげー、銃!!」

一系乱れぬ儀仗隊の動作で、小銃の銃先が一斉に天を向く。本来ならここで音楽隊が栄誉礼の演奏をするのだが、戦闘任務のこの部隊には、さすがについて来てはいない。それでも、一国の高級軍人だけでなく、政府高官までもがそろったこの視察に、自衛隊は今できる最高の儀礼を持って出迎えた。

「本日視察の代表を務めるブリタニア政府の、マーク・スペースです。」

「ご案内をさせていただく、日本皇国海上自衛隊の滝川海将補と……同じく陸上自衛隊の工藤陸将補です。」本日は遠いところお越しいただき、光栄です。」

視察の代表を務めるマークは、事前に異世界から来た軍隊ということとを聞かされていたが、これといって軍事に詳しいわけではないため、それほど違和感はなかったが、周りにいる軍人たちは、すでにその異質な空気に気づいていた。

彼らがいるのは基地の端にある港で、そこには先ほどの通り、揚陸艦【のの】と補給艦【おうみ】が停泊していた。特に全通式甲板を持つ【のの】は、この時代からすれば航空母艦にしか見えず、ごてごてと対空火器を積み込んだこの時代の空母と違い、ステルス性を重視したスマートな艦影は、ブリタニア海軍の代表をはじめ、見るものをくぎ付けにした。

「リアアドミラル・タキガワ。この空母は対空火器が全く見当たらないが、よほど防御力に自信があるのか？」

「いえ。ダメージコントロールには力を入れています、ネウロイに遭遇すればひとたまりもありません。その分、高度な早期警戒システムを構築し、強力な護衛を付けますから。それと……この艦は空母ではなく、揚陸艦です。」

「空母ではなく、揚陸艦だと……！」

驚くのも無理はない。この時代の揚陸艦と言えば、ビーチング——砂浜に直接乗り上げる方式の戦車揚陸艦がほとんどで、専用の揚陸艇だけでなく、航空機まで運用可能な揚陸艦は考えすらつかない。

そもそもそれを可能とする大型の輸送ヘリコプターやVTOL機は、この時代ではまだ実用段階には至っていないのだ。そして驚きのあまりボー然とする一行は、案内されるままに艦内へと入っていった。

一方そのころ、ミーナ達ストライクウィッチーズ10名も、午後に披露される訓練の為、沖合の【しゅんほう】へとやってきていた。なお、サーニヤは夜間哨戒後のため、基地で待機という名の睡眠中だ。

会議室に臨時に作られたブリーフィングルームで、その日の天候と訓練内容が説明された。その内容は決して難しい物ではなく、戦闘機が曳航する吹き流しをネウロイに見立てた、迎撃訓練を行うというものだ。

訓練には501からバルクホルンとハルトマンのエースペア。海上自衛隊からはウィッチ2名とF/A-4Cファントムゼロ2機が加わる。とはいえいくら視察とはいえっても、補給の見込みがないミサイルやらを使う訳にもいかなかったため、ファントムはもっぱら、飛行展示を行う。

そうした確認作業が終わると、スピーカーから昼休みを告げるラッパが鳴り響いた。

「ちょうどお昼のようね。」

「世界は違えど、海軍のラッパは同じのようだな。」

「それでは、食堂の方へと案内します。」

先ほどまで説明をしていた若い2尉の言葉に、11人は食堂へと向かった。

「んん…この匂いは…。そうか、今日は金曜日だったな。」

「…？ねえ芳佳ちゃん、金曜日だと何かあるの？」

「金曜日…あれ、…なんだっけ？」

「まったく、お前はそれでも扶桑海軍か？海軍の金曜の昼食と言え
ばあれだろう。」

「そうだ！今日は金曜カレーだ！」

その名の通り、海造自衛隊は毎週金曜日の昼食をカレーと決めている。
旧海軍からの伝統で、代わり映えない洋上で曜日感覚を失わ
ないためでもあり、肉や野菜の入るカレーは栄養面で隊員を守る役
目もある。もちろん、この世界の扶桑でもその伝統は存在していた。

「間もなく時間のようだね。」

「いったいどんな訓練を見せてくれるのか、楽しみだ。」

午後の課業開始を告げるラッパの後に、視察団一行は【のと】の飛
行甲板上に来ていた。

これから行われるのは、先に説明した迎撃訓練だ。用意されたパイ
プ椅子に座り、口々に意見を言うブリタニア軍人たち。その横では、
転移してからある意味一番忙しい広報担当の海曹が、司会進行役を
務めている。そのナレーションとともに、まずは2機のファントム
ゼロが青空の元姿を現した。

「始まったようですね。」

「戦時下と言う割には、随分とのんきなものだな。」

レーダースクリーンに映る2機の機影。まるでダンスを踊っている
かのように交差するそれを見て、【しゅんほう】CDCクルーは呟

いた。

「しかしこれで我々の实力を見せることができます。」

「実戦じゃないんだ。いろいろと資料映像を見せたらしいが、どれだけ信用してもらえたか。」

『ホーム、こちらホークアイ03。』

「ホークアイ03、ホーム。何があつた？」

『正方位120、アンノウン探知。この時代の航空機では出せない速度で接近中。』

「詳細はいりました。高度19000フィート、速度430ノット以上！数、4！」

「間違いない、ネウロイだ！訓練中止、スクランブル！全艦対空戦闘用意、対空見張りを厳となせ！」

『カン・カン・カン・カン・カン……対空一戦闘よい！！』

「……ええっ！……」

朱里達自衛官、そしてミナ達ウィッチーズもまた、この放送に驚きを隠せないでいた。なにしろ、501航空団観測班の情報では、今後しばらくはネウロイの襲撃は無いと予測されていたのだ。

「艦橋、待機室！アラートは？」

『こちら艦橋、既に発艦しています。接触まで約15分！』

「藤田3佐、ただちにファーストチームの出撃準備を。状況によっては、セカンドチームの援護に向かいます。」

そう言ったのは、第172機械化戦闘飛行隊の隊長、本宮深雪2等海佐。彼女は自衛隊ウィッチの中でも、5年前に起きた竹島有事に参加した数少ない実戦経験者だ。

「全員聞いている通り、我々も迎撃準備に入ります。少佐、割り当てを。」

「分かった。バルクホルン、ハルトマンは彼女達と共に先行。残りは基地で装備を整えたのち、シャーリー、ルツキーニ、エイラは私

と共に出撃する。宮藤とリーネは、ミーナの下でいつでも行けるように待機だ。」

「了解！」「了解！」

そして【しゅんほう】の艦内と外では、慌ただしく人が動き出した。アラート待機についていたセカンドチームのウィッチ、高山零^{タカヤマシズク}1等海尉と東柳美咲^{トウヤナギミサキ}3等海尉が出撃。そのあとを追って、2機のファントムも空へと上がる。さらにセカンドチームの残り二人も、バルクホルン達と一緒に空へと上がった。

しかし戦いの本番は、まだ始まってはいなかった。

合同訓練（後書き）

名前：本宮深雪 モトミヤミユキ

階級：2等海佐（飛行隊長）

年齢：22歳

身長：164cm

体重：身長に対する平均値

好き：弟（極度のブラコン）

嫌い：お姉さまと呼ぶ後輩

趣味：歌舞伎鑑賞

特技：剣舞、居合

容姿：黒髪ロング（腰まで）

性格：お姉さん（と言うよりお母さん）

使い魔：日本オオカミ

固有魔法：魔導針（魔力レーダー）

使用装備：11式艦上戦闘脚（FU-3A）

99式13mm多銃身機関砲

飛羽ノ美祢重（居合刀）

彼女たちの力（前書き）

ネウロイとの戦い…

戦っているのは、朱里たち自衛隊不だけじゃありません。

彼女たちの力

E-2D早期警戒機ホークアイの誘導で、接触予定空域へと進出した雫と美咲、そして2機のF/A-4C戦闘攻撃機ファントムゼロ。接近してくる敵を捕らえ先制したのは、ファントムだ。

レーダーでターゲットを捉えたファントムは、次々とミサイルを発射。FCS——火器管制装置によって、4機の目標にそれぞれ1発ずつAAM-5——04式空対空誘導弾が命中する。しかしそこで、驚くべきことが起きた。

『ターゲット、ロストコンタクト。嘘だろ…目標…kill…』

「そんな…あの大きさのネウロイが、たかだか一発のミサイルで撃墜されるはずが…」

『ホークアイ03より出撃中の各機。ターゲット撃墜を確認…。目標は、確かに消失した。』^{ロスト}

ホークアイのオペレーターの声に、言葉をなくすウィッチ達。ネウロイの破片が空中に広がる中、後続の坂本達も到着した。

だが一人、状況を冷静に見つめていたものがいた。

「美咲、奴はまだ撃墜されていない。ネウロイの反応は、微だけどもまだ残ってる…」

「えっ…はっ！」

彼女たちの目に映ったのは、破壊されたはずのネウロイが、再生し始めたのだ。

「嘘…まさか奴らは…」

「おそらく、^囃…」

そう言うと、雫はおもむろに左目を閉じた。そして次に開いたときは、その瞳の色は赤く輝いていた。

彼女の持つ固有魔法『魔眼』は、遙か彼方を見通し、ネウロイのコアを探り出すことができる。彼女の瞳には映っていなかった…奴らのコアが…

「デコイ…じゃあ、本当の狙いは！」
「っ！すぐに艦隊に戻るわよっ！」

『ウウウウ——！！！！』

装備を整え出撃した坂本達を見送ってから数分後、突如ブリタニア基地にも、空襲を告げるサイレンが響き渡った。

「…解ったわ。敵は3機、グリッド東11地点方向から、真っ直ぐこちらに向かっているわ。」

「そんな…全然違う方向から…」

基地の司令室に戻ったミーナ達は、レーダー室からもたらされた情報に、息をのんだ。

「リーネちゃん、ネウロイがそのまま行けば、どこに？」

「このまま真っ直ぐ言った先は…ロンドン！」

「ええ…。少佐達を呼び戻しても、間に合わないわ。…サーニヤさんは動けないから、私と宮藤さん、リーネさん、この三人で行きます！ストライクウィッチーズ…出撃！」

「了解！」

「なぜ私達は出撃できないのですかっ！」

【しゅんほう】のブリーフィングルームに、朱里の怒号が響き渡る。テーブルを挟んで向かい合っているのは、飛行隊長の深雪だ。

「今言った通りよ。セカンドチームが皆出払っている今、この艦隊を守るのは、あなた達ファーストチームしかないの。出撃は、

私と光^{ヒカリ}、大野1尉と綾波3尉の4名で行きます。朱里、あなたは奄宮2尉と待機です。」

「でも、ロンドンには何万人もの民間人が…」

「じゃああなたはそのため、この艦隊を全滅させる気なの！」

深雪の言葉に、ブリーフィングルームは静まり返った。

それでも朱里は、せめて美園も一緒に出撃させてと食い下がるが、結局認められず、悔しさに歯を噛みしめる朱里をよそに、深雪は部屋を後にした。

そのころ、飛行甲板上ではファントムの発艦作業が急ピッチで進められていた。一見するとスクランブルで上がった機と変わりないが、胴体ウエポンベイにはAAM-5の他に、アクティブレーダーホーミングの中射程ミサイル、AAM-4——99式空対空誘導弾4発が搭載されている。ファントムゼロの空対空フル兵装だ。

艦首とアングルドデッキに埋め込まれている2基の電磁式カタパルトを使い、次々と空中へと躍り出る。計8機が飛び立ち、一路ネウロイへと向かった。

航空機の少なくなった飛行甲板。そこに深雪は立っていた。飛行隊長と言う立場から、あまり前線の方に立つことはないが、その表情には、一部の曇りも見当たらない。履いているストライカーユニットのインテークには、自衛隊ではほとんど見かけない撃墜マークが、誇らしげに描かれている。

「よろしいのですか、隊長？」

暗い顔を浮かべる深雪に、飛行班長で深雪のウィングマンを務める、ハセガワヒカリ長谷川光3等海佐が尋ねる。彼女もまた深雪同様、過去に竹島有事に出撃したウィッチの一人だ。

「さすがに、全滅は言い過ぎでは…」

「いいの、あの子には…あれくらい言わないと。あの子は、リーダーとして優秀な実力を持つけど、少し感情に流されるところがある。それさえ克服できれば…」

「隊長の後継として、申し分ない…ですか。」

感情を顔に表さずと言う光に、苦笑いを浮かべながら、深雪は飛び立った。

ミーナ達ストライクウィッチーズ3人と、深雪達海上自衛隊4人は、先行したファントムとは別に、ロンドンへと向かっていた。

深雪たちへ送られたファントムからの情報では、敵は予想以上の速度で飛行しているとのこと。闇雲に向かっても、振り切られて終わる。

そこでミーナと深雪は、二段構えの防衛線を張ることにした。

深雪達の第一防衛線で敵を迎え撃ち、そこで抜けられた場合、目標を追撃しながら、ミーナ達第二防衛線と共同で撃墜まで持ち込む。

深雪達のジェットストライカーは、最高で530ノットまで出せる。現在500ノットで侵攻するネウロイにどうにか追いつくことができる。しかしその速度では魔力の消費が激しく、さらに攻撃をかわせるような機動は出来ない。

勝負はすれ違う一瞬だけだ。

『ホームより各機へ。現在ファントム07がターゲット本体と交戦中。シアラー01は所定位置に到着次第待機せよ。』

「シアラー01、ラジャー。それではミーナ中佐、お気を付けて。」

「そちらもです。」

そう言つて、ミーナ達は第二防衛線を築くため、さらに後方へと進んでいく。

迎撃ポイントで、ホバリングに移る。後はホークアイのオペレーターが、攻撃タイミングを指示してくれる。

1分…2分…たった数分が、何時間かのように過ぎていく。そして…

「シアラー01、ホークアイ03！ターゲット3機、そっちへ向かう！」

「全員、射撃用意！各員捕捉したのち、全弾射撃開始！」

「了解……」

命令と同時に、ホバリングから水平飛行状態に移る。こうしないと、ユニットの近射程ミサイルが発射できないのだ。右腕のガンに内蔵されたレーザー測距器が、目標を捉えた。HMDに表示される目標との距離が、急速に縮まる。そして次の瞬間、インカムからミサイルが目標をロックしたことを告げるビープ音が響く。

「シアラー01、フォックスツー！」

4人のユニットから、計8発のミサイルが飛び出す。赤外線と画像認識の二つの誘導システムにより、目標正面から発射できるこのミサイルは、瞬く間に空中を駆け抜けその役目を果たした。

着発信管が、あるいは近接信管が作動し、弾頭が破壊を生み出す。

1機撃墜…全弾を先頭のネウロイに集中させたのだ。

これで残り2機…

「シアラー01、フォックススリー！」

そして再度ガンを構え直し、二人で1機ずつ集中射撃に移る。

これで終わる――

誰もがそう感じたその時、ネウロイは思いもよらない手段にでた。

ブリーフィングルームに備え付けてある無線機からは、上空で戦っている深雪達の声が聞こえてきた。
そんな声を、朱里はどこか上の空で聞いていた。

尊敬する上官、深雪の口から出た「全滅させる気なの」と言う言葉。もちろん、朱里自身そんな気などこれっぽっちもない。冷静になってみれば、深雪の言った命令は至極当たり前の物なのだ。むしろ虎の子の空母にたった2人しか残さず、4人も出撃させたとと言える。

「バカだな…私…」

思い上がっていた。

この世界に来た初日、初めてネウロイを倒したのは、他ならぬ朱里なのだ。

あの時撃墜できたのは私の実力…

私の判断が正しかったから…

気が付けば、随分とみんなに自慢していた。

食堂で…ブリーフィングルームで…居住区で………

だが違う。ネウロイを撃墜できたのは、ユニットや装備の性能が、この世界ではけた外れだから…

そして何より…協力してくれるみんなの力があつたから。

自分の実力なんて…これっぽっちしか影響していない。

暗く沈む朱里。その耳に、思いもよらない言葉が入ってきた。

『シアラー01よりホーム、並びにミーナ中佐！目標2機を撃墜、もう1機は、分離しながら増速中！追尾不能！』

予想外だった…いや、そんなのは言い訳に過ぎない。魔導タービンを全開で飛ばすが、とても追いつけない。

敵の速度はおよそ670ノット以上…もはや音速の世界だ。

「光！奴に追いつける？！」

深雪は最後の頼みと光に聞いた。光の固有魔法は、『高速』なのだ。シールドを展開すれば、音速にも届くスピードを出せる。

「無理だ！高速を使っても長時間は飛行できない！」

必死に12・7×99弾を放ちながら追い縋ろうとするが、そのスピード差はもはや歴然だった。

やがて機銃弾が届かなくなり、一か八か、光が『高速』を使い距離を詰める。すかさずトリガーを絞り数発を当てたが、コアを破壊するまでには至らず、その前の戦闘もありすぐに魔法力の限界が来てしまった。

「ミーナ中佐、聞こえますか?!」

『本宮中佐、状況はホークアイから聞いています。我々が…必ず墜とします!』

音速の速さで突き進むネウロイ。ロンドンまでの進路で、このネウロイを迎え撃てるのは、ミーナ達3人だけだ。

「そう言えば、二人がここに来て始めの頃、こんな感じの任務があったわね…」

緊迫する状況の中、雰囲気合わないミーナの声に、芳佳とリーネは驚いた。

かつてガリア解放の為此の基地で戦っていた時。芳佳にとっては、ストライクウィッチーズに来てから初めての出撃。リーネにとっては、初めて戦果を挙げた出撃。それが、今の状態とよく似ている。

「ミーナ中佐…」

「二人はもう、あの時の二人じゃない。成長して、一人前のウィッチ子になっているわ。」

「そんな…」

きつとお世辞だ…そう思う二人だが、その一言で緊張がほぐれ、肩の力が抜けていく。そして心の底から湧きあがるのは、『自信』だった。

そして、その時が来る。

『ホークアイ03よりミーナ中佐。目標、間もなく見えます！』

「解りました。それでは行きます。宮藤さん、私と一緒に牽制射撃を……リーネさんは、止めを。」

「了解！」

その直後、遠くに光った太陽の反射光。それは徐々に大きくなり、やがて黒く光るネウロイとなった。

高速で突き進むそれは、ついに3人の射程距離に入る。

「攻撃開始！」

その言葉を合図に、ミーナと芳佳は射撃を始める。

もとより当てる気などない。敵が不用意に進路を変えないように、牽制するのが目的だ。そして次には、リーネが必殺の徹甲弾を撃ち込む。

二人の機関銃と違い、ボルトアクションで弾を込める対装甲ライフルだが、リーネはその動作限界ともいえる素早さで次弾を込める。そして撃つ。

動きを封じられているネウロイは、次々飛んでくる正確な狙いの徹甲弾をよける事ができず、1発目で外殻を凹まされ、2発めがそれを貫通。3発目が内部を破壊し、4発目が遂にコアを捉えた。

撒き散らされたネウロイの白い破片。芳佳が展開した規格外のシールドが、3人をそれから守っていた。

『ホークアイ03より報告！目標撃墜……繰り返し、目標を撃墜！』

【しゅんぽう】の艦尾に設けられた広いスペース。航行中、艦載機のエンジンテストに使われるその場所に、朱里は立っていた。ピトッ「ふひいやああああー！」

「あつ…ごめん。そこまで驚くとは思わなくて…」

頬に冷えた缶ジュースを当てたのは、他ならぬ深雪だ。

今では貴重品となってしまうたそれを手に、二人は並んだ。先の事もあり、気まずい雰囲気が出る中、先に口を開いたのは、朱里だった。

「昼間はすみませんでした隊長…。隊長の考えに気付かずに、あんなことを言ってしまったて…」

「そんな事ないわ。私の方こそ、ごめんなさい。あんなきついこと言つて。光にも注意されちゃった。」

「そんな事ありません！あの時の自分は、どうかしてたんです…。自分はすごいんだって…そんなこと考えて、隊長の命令を聞かないで…」

「それくらい誰だって一度はあるわ。私だって。」

「えっ！」

深雪の意外なその一言に、潤んでいた朱里の目は、驚きの色に変わった。

「隊長が…ですか？」

「竹島有事の事は、知ってるわね…」

自衛官ならだれもが知っている竹島有事…

自衛隊が創設されてから初となる、大陸側ネウロイからの侵略だ。

戦域が日本海に浮かぶ竹島の近くだったことから、この名がついた。

「あの頃はちょうど、私も朱里と同じ立場だったわ。初めてチームのリーダーになって、部隊を率いてネウロイと戦つて…。数少ない戦果を挙げてそれで浮かれて…その時の隊長と大喧嘩しちゃった。」

「……………」

「でもね、朱里みたいにすぐには気付けなかった。自分がいかに未熟かなんて…。だから訓練で、隊長に撃墜されちゃった。」

「撃墜つて…まさか…」

「訓練で海に叩き落された。」

笑顔で言う深雪だが、朱里の方は苦笑いだ。

「そのおかげで、色んな意味で頭が冷えた。そして、今の自分がいる。失敗は誰だってするもの、いくらだってしていいの。ただそれから、ちゃんと何かを学べること。朱里は、なにか学べた？」

夕日に染まる深雪の横顔に、一瞬見とれてしまった朱里。そしてすぐに、力強くうなずいた。

「はいっ！」

彼女たちの力（後書き）

名前：長谷川光

ハセガワヒカリ

階級：3等海佐、飛行班長

年齢：20歳

身長：172cm

体重：身長に対する平均値

好き：和食、和菓子

嫌い：洋菓子

趣味：お茶（茶道）

特技：弓道

容姿：黒髪ショート

性格：クール、厳格、大和撫子

使い魔：ハヤブサ

固有魔法：高速（シールド展開時音速飛行可能）

使用装備：11式艦上戦闘脚（FU-3A）

99式13mm多銃身機関砲

SIG P220 9mm拳銃

以上、第3話の深雪と合わせて、第172機械化戦闘飛行隊ナンバ
ー11&2でした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4882y/>

ストライクウィッチーズ 未来から現れし戦乙女

2011年12月3日20時47分発行